

## 【日本の大学】第 22 回——東京外国語大学：外国研究・教育機関の草分け

日本における外国研究、外国語教育の草分けとして、その起源をさかのぼると 150 年近い歴史を刻んできたのが国立大学法人東京外国語大学(東京外大)である。この間、世界との交流が進む中で、多言語化、多文化化に対応して次世代の日本を担う人材を育てていくとの役割を担い続けている。英語名は Tokyo University of Foreign Studies(TUFS)である。



### 分かりにくい大学の「祖」

歴史は古いのは確かだが、ではいつ、どの学校が東京外大の祖であり、創立年はいつなのか、はっきり示すことは難しい。江戸幕府によって開校された蕃書調所(1857年)もその一つだが、蕃書調所はその後、東京開成学校(1868年開校)となって、現在の東京大学へとつながっている。

東京開成学校は、英語、フランス語の2学科があり、5年後(1873年)には東京外国語学校となった。同校は英、独、仏、ロシア、中国語の5語学科を持ち、東京外大の「祖」と言っても良い存在ではあるが、同校は1887年に、ほかの学校と合併して東京商業学校となって、現在の一橋大学の元祖ともなった。その時点で、外国語教育として独立した教育機関は

いったん姿を消している。

その後、1897年になって、東京商業学校から改称した高等商業学校に付属する機関として外国語学校が再興された。この時点で教科の数は、7学科（英、仏、独、露、西、中、韓）であり、修業年限は3年だった。1899年には、付属外国語学校は、東京外国語学校と名を改め、高等商業学校から分離独立した。7学科に伊が加わり8学科となった。以降、東京外国語学校は、名称を変えながらも独立した国立の教育機関として現在までつながっている。

このため東京外大では、1873年を建学の年であるとし、1897年を創立の年、1899年を独立の年である、としている。

第2次大戦前には、神田の大火、関東大震災、第2次世界大戦の戦災によりその都度、校舎が全焼するなどの災害を被り、それに伴う移転を繰り返したり、新しい言語学科の新設をしたりといった変遷をたどった。

以下、東京外大のホームページなどから、大学の現状を見ていこう。

新制大学として発足したのは、ほかの国公立大学などと同じ1949年である。国立学校設置法の施行によって、東京外事専門学校を包含して設置された。この時点では、12学科からなる外国語学部だけでスタートした。内訳は、英米、フランス、ドイツ、ロシア、イタリア、イスパニア、ポルトガル、中国、蒙古、インド、インドネシア、シヤムであった。その後、徐々に学科や部局の数を増やしていった。

学部のほかに、博士課程を持つ大学院地域文化研究科、全国共同利用研究所であるアジア・アフリカ言語文化研究所、教育関係共同利用拠点である留学生日本語教育センターを保有する大学へと拡大・発展している。

大きな改革がなされたのは1995年で、外国語学部を7課程と3大講座に改組した。7課程とは、欧米第一、欧米第二、ロシア・東欧、東アジア、東南アジア、南・西アジア、日本であり、3大講座とは、言語・情報、総合文化、地域・国際である。



## 2 分野からアプローチ

2012 年には、外国語学部を改編し、言語文化学部と国際社会学部とに分かれた。言語文化学部は、主に人文科学系の学問から外国語にアプローチするのに対して、国際社会学部は社会科学系の分野からアプローチする形に切り分けた。

言語文化学部の学びの重点は、世界のさまざまな地域の言語や文化の学習に力点が置かれている。入学後は、「世界教養プログラム」と呼ばれる各学部共通のカリキュラムで、入学時に選択した言語やその地域に関わる基礎的内容や教養科目を学ぶ。英語、そのほかの外国語を多様に組み合わせ、4 年間を通じて高いレベルで修得することを目指す。言語科目の学習は、基本的には 4 年間継続するが、3 年次からは学部のコースに進学し、専修科目として置かれている専門教育を受ける。専攻言語は 28 言語に上る。

国際社会学部では、世界のさまざまな地域の複雑な仕組みを分析し、理解する能力を持ち、グローバルな視点から問題を考え、解決することができる実践的な能力を備えた人材を養成する。各地域の政治、経済、社会と歴史的背景に関する専門知識を深めていく。また、紛争・災害・貧困・難民など、現代社会が直面する諸問題を社会科学的な手法で分析し、問題の本質を洞察し、問題解決に資する能力を養う。各学部共通の「世界教養プログラム」の中で基礎的な内容や教養科目を学んだあと、3 年次からは学部のコースに進学し、専修科目として置かれている専門教育を受ける。



三つのコースがあり、「地域社会研究コース」では、主に地域別の構成で、世界のさまざまな地域に住む人たちを具体的な事例に即して考察する。「現代世界論コース」は、複雑怪奇な様相を呈している現代社会、そこに生じる複雑多様な問題群を自ら発見し、柔軟で批判的な思考によって問題の本質をとらえ、幅広い専門知識や技術を使って、粘り強く問題解決のために行動できる人材を養成する。三つ目の「国際関係コース」は国際社会の現実を様々な角度から理論的・歴史的・実証的な手法を用いて理解を深める。国際機関やグローバル企業、団体をはじめ、国際関係を専門とする広範囲な仕事に従事する人材を育成していく。



国際交流

### 国際日本学を学ぶ

新しく 2019 年に誕生したのが、国際日本学部である。これは、「国際的な視野から日本を総合的な視点で学ぶ学問」を中心とする新学部である、国際日本学という比較的新しい分野を学ぶ学部で、日本に興味を持つ海外からの留学生が大きな割合を占めているのが特色である。定員は 75 人で、このうち日本人が 45 人、留学生が 30 人となっている。

学びの特徴としては（1）日本そのものをフィールドとして分野を超えた多角的な視点で日本を捉えなおす（2）日本人学生と留学生と一緒に学び、英語と日本語をコミュニケーションツールとして用いる（3）自律性を養い、多能な人々との協働による問題解決型のアクティブ・ラーニングを行う——などが挙げられよう。

これら 3 学部に入學しても、新入生はまず、「世界教養プログラム」の科目を履修する。プログラムには文科系と理科系の両方の科目が用意されており、国際社会で活躍するために欠かせない知性と教養を身につける。同プログラムには「基礎科目」「教養科目」「言語科

目」「地域科目」の四つの科目区分がある。このうち「教養科目」を例にとると、現代社会で必要とされる基礎的な知識と技能、幅広い教養を付けるための科目が並んでおり、「現代教養科目」「自然科学系科目」「教養日本力科目」「キャリア・協働科目」「臨地学修科目」などから構成されている。

グローバルに通用する英語力を身につけることも必要となる。英語で行われる授業が多いため、英語での講義を理解し、自らの考えを発信することが求められる。高校レベルの英語力を高度な能力へと高め、さらにビジネス界で通用するレベルまでアップすることを目標に、段階的に学ぶ態勢を整えている。留学、就職、大学院進学など各自の目的や専門に合わせて柔軟に履修していく。英語そのものを学ぶ授業だけでなく、英語によって学ぶ授業、留学生との共学・交流など、英語力を伸ばすためのさまざまな仕組みを用意している。

日本人学生の約8割が、卒業するまでに留学を経験する。1年次で半数以上が短期留学を経験し、3年次で約6割が長期留学を経験している。留学先の多様さは突出しており、世界の約70か国・地域にある169大学と学生交流協定を結び、長期の交換留学プログラムを実現している。教職員一体となって海外で学ぶ学生へのサポート態勢を整えている。渡航前の危機管理研修や渡航中のオンラインシステムである「ただいま留学中」を通じたサポート、経験豊富な教員や世界各地にいる卒業生のサポート態勢が整っていることも強みであろう。

ただ、2020年に関しては海外への留学、海外からの留学共に大半の学生が渡航も来日もできない状態が続いている。秋になって海外からの留学に関しては来日できる学生が増えてきているものの、海外留学はほとんど実現できない状態が続いているという。

キャンパスは、第2次大戦以前は神田錦町にあったが、相次ぐ火災、戦災により移転を余儀なくされた。1940年以降は、東京都内の北西部の北区西ヶ原にある校舎を利用してきた。2000年になって東京の西郊外にある府中市のキャンパスに移転し、現在に至っている。



キャンパスの様子

現在の学部学生は、言語文化学部が 1821 人、国際社会学部が 1832 人、新設の国際日本学部は 1, 2 年だけで計 160 人の計 3813 人が在籍。また、大学院は計 516 人が在籍している。(2020 年 5 月 1 日現在) 留学生はこのうち学部生が 174 人、大学院生が 252 人の計 426 人である。ほかに研究生 87 人、交換留学生 129 人、その他 25 人を含めると計 667 人が在籍中である。

これに対して教員は 250 人でうち外国人教員は 41 人である。海外協定校は、72 か国・地域の 215 機関に上っている。

現在の学長は林佳世子氏である。お茶の水女子大学を卒業後、同大修士課程修了、文学博士、東京大学人文科学研究科(東洋史学)をへて、東京外国語大学に講師として入り、助教授、教授、副学長などを経て 2019 年 4 月から学長に就任した。





学長林佳世子氏

文：滝川 進

写真：東京外国語大学 Facebook から